

## ウトナイ湖の残留ハクチョウ

村上速雄

053-0042 苫小牧市三光町3-11-21

新聞などで全国報道されていますので皆さんもご存知と思いますが、ここ苫小牧市のウトナイ湖でオオハクチョウが4年連続繁殖して毎年雛が1~4羽巣立っています。ペアの雄は正常に飛行できる個体ですが、雌は飛べない個体であり、一年中ウトナイ湖周辺で生息していると思われます(川崎 2003)。

今回は繁殖個体ではなく、残留している個体群について紹介したいと思います。ウトナイ湖にはペア以外に怪我をして飛べないハクチョウが20羽ほど年中生息していますが、このことを知っている方が少ないことを最近知りました。これらのほとんどの個体は怪我を治療して人為的に放鳥されたものでなく、自然に居ついたものと考えられます。決して羽を切って放鳥した個体ではありません。そしてこれまでその個体群からペアになったことは2003年までありませんでした。

これはタンチョウについて聞いた話です。怪我した個体同士でペアリングを行ったところケージ外の野生の健全な個体に目が向いてしまい、うまくいかなかったことがあるそうです。ウトナイ湖のオオハクチョウでも同じことが言えるのでしょうか。おそらく今回のペアは変わり者で特異な例と思われます。

次に残留ハクチョウの行動を紹介します。冬は皆さんが想像するように、給餌場に集まり観光客を楽しませています。お土産屋が休みの日以外、押し麦が常時販売されており、ほとんどの観光客はそれを与えています。観光客は北海道の玄関口である千歳空港に非常に近いため(車で15分)、日によって違いますがかなりの人数、色々な国の人が訪れます。

では夏はどうでしょう？ 夏も押し麦を置いています、残留ハクチョウはめったに給餌場によって来ません。給餌場から1km以上離れた対岸やウトナイ湖に流れ込む川に分散し、主に水草のマコモを食べて暮らしています。たまに給餌場に来ますが警戒心が強く、人と距離をとり、あまり上陸しません。また上陸しても少数で短時間です。またハクチョウは畔を陸上でとります。水辺に近いところで島になっているところや浮き巣を作ってそこで休むと聞いたことがあります。羽毛が換羽して飛べないため、人やキツネ・ノイヌといった外敵の少ないところで生活するという説もあります。これは野生に近い行動といえ、冬と違った姿を見せます。ウトナイ湖周辺には外敵から身を守ることができる場所が多いので、飛べなくても生息できるのでしょう。

最近、餌付け問題が挙げられています。今回は生息地や植生の変化でなく、死亡事故に絞って話を進めます。また病気の集団感染も省きます。餌付けによって死亡するという一見、矛盾した話のように思われますが実際起こっています。例として小鳥での事故を紹介します。よく冬に餌台を設置し、自宅の庭に小鳥をよんで楽しんでの方がおられます。何かで読んだのですが、確かアメリカで起こった事故(はっきり覚えておらず申し訳ありません)で、冬に餌台に大量に餌を置きたくさん小鳥をよんでいた人がいました。しかし留守にして何日か餌を置かなかったため、帰ってきたら小鳥がたくさん死んでいた事故です。完全にその家の餌を当てにし、自分で餌を捕らなくなりため起こったと考えられます。このように、完全に給餌場の餌に頼ってしまうと、自分で餌を探さなくなることがあり、餌不足のとき給餌場など人目につくところで餓死する事故がいくつかありました。

ハクチョウでは厚岸湖での事故(渋谷 2001)がよい例です。詳しいことは参考文献を見てください。そのときは異常寒波が来たという自然災害も加わり、被害が大きくなりましたが、結局人間からの餌に頼ってしまい、自分で餌を探らなくなったため、十分に餌が採れず、もしくは餌をもらえず餓死しています。

餌付けによる死亡事故の原因として、鳥が自ら餌を捕らなくなったためでもありますが、餌を継続的でなく一時的に、かつ十分な量を与えなかったため、つまり人間の管理の不手際によって起こると考えられます。

前述しましたが、ウトナイ湖ではお土産屋が休みの日以外、押し麦が常時販売されています。押し麦の量はビニール袋に2つかみ、1日100袋ほど置いています。毎日たいてい観光バスで来られたお客さんは10~30分と短い時間にその餌をぱっとあげるだけです。また長い時間いる人はごく限られた写真撮影かバードウォッチングのため訪れた方だけで、一時的に膨大な量の餌を与える人はいません。また定量を超えたら、観光客が多くても追加しません。餌は多からず少なからずといったちょうどいい量と思います。また押し麦があるので、パンや揚げ菓子を与える人はかなり少ないです。

また正常に渡るハクチョウやカモは、春・秋の渡りの時期に一時的に給餌場によりますが、結氷している12月上旬から3月上旬はウトナイ湖からいなくなります。例外に一冬中のこるカモが100羽ほどいますがほんの一部と思います。

いまのところウトナイ湖では餌付けによる餓死をする事故はありません。20羽ほどの飛べないハクチョウたちが暮らしていける必要最低限の給餌でないかと思います。

#### 参考文献

川崎慎二, 2003. ウトナイ湖におけるオオハクチョウの繁殖例. 日本の白鳥 (27): 9-17.

澁谷辰生, 2001. 厚岸水鳥館ホームページ <http://www.marimo.or.jp/AWOC/>  
[http://www.marimo.or.jp/AWOC/feeding\\_problems/problem.html](http://www.marimo.or.jp/AWOC/feeding_problems/problem.html)  
[http://www.marimo.or.jp/AWOC/feeding\\_problems/feeding\\_h12.html](http://www.marimo.or.jp/AWOC/feeding_problems/feeding_h12.html)